藤縄謙三教授追悼文集

藤縄学兄を偲ぶ

新田一郎

藤縄学兄の病気入院のこと、それも長期にわたる病院生活で心身共に衰えが激しく面会も殆ど断られていたことは就実女子大時代の同僚梅原郁氏から伺い承知していた。昨年七月のことである。ただ入院の直接の原因は身体的というよりむしろ精神的疲労の方にあるように思える、という梅原氏の話から判断して藤縄氏が再び教壇に立つことは決して困難ではないと考えていた。それだけに十月七日の新聞誌上で氏の逝去の事を知った時しばらくは呆然自失の中にあったことを告白しなければならない。

藤縄氏は昭和四年の生れなので小生より三年の先輩である。しかし昭和の一桁世代生れの者にとってこの三年の隔たりは極めて大きかったように思う。終戦時の昭和二十年夏、旧制中学生であったという点で私は藤縄氏と同じ位置におり、体験を共有している。しかし占領下の米軍主導の下で実施された学制改革によりその後の私の学生生活は藤縄氏のそれとは全く異なるものとなってしまった。氏は旧制中学そして旧制高校の全課程を経験されている。一方昭和七年生れの者は新制高校に併設された旧制中学校の第一回卒業生となり、旧制高校には受験の機会すら与えられなかった最初の学年の者となってしまった。旧制高校への憧れが先行しその経験者に対し尊敬と羨望の念が一層増幅される私のような世代を生んでいく背景にはこのような事情があったと自覚している。藤縄氏が小生にとり大きな存在、尊敬さるべき先輩であったことは無論、氏の学者・研究者としての偉大さに由来する所が大きい。しかし氏が旧制高校のOBであることに内包される諸要素が極めて強力であったことも動かし難い事実である。

ところで藤縄氏のギリシア史との出合いが敗戦という民族的カタストロフ体験と関連していたことは氏の発言から判明する。氏は「ひと五三三号」（京都新聞）の中で「敗戦ということも手伝って異質なヨーロッパ文明に逆に興味がわいたんです。そのヨーロッパ文明の始まりがギリシア・ローマ、結局そこから研究することになり現在まで続いてきた」と述べておられる。インタービュアーはこの発言を当時日本人に「重くのしかかっていた……敗戦からくる西欧への劣等感」との関わりで引用している。しかし敗戦とギリシア史研究の間の関連

性は事実としても、この引用の仕方は藤縄氏の真意を正しく伝えていないように私には思える。氏のヨーロッパ文明の受け止め方は「異質な」文明としてのヨーロッパ文明ということであり、日本とヨーロッパ文明の間に優劣・高低的尺度を適用していないからである。私にはこの立場は藤縄氏の学問研究態度を理解する上でこの上なく重要に思われる。なぜなら敗戦後、長期にわたって歴史学界をリードした研究態度の前提には近代的・先進文明としてのヨーロッパ、封建的・後進文明としての日本という欧米中心史観が主流をなしていたからである。上記の藤縄氏の発言は一九八五年、氏の五十六歳の折のものであり青年期の発想を若干修正して述べた部分もあるかも知れない。しかし氏が若い頃からヘロドトスに傾倒していたことから判断して前述の発想は当初から保持していた立場と考えてよいであろう。なぜならヘロドトスはオリエント世界の文明とギリシア文明（西洋世界）を優劣・高低ではなく種・タイプの違いという観点から考察しているからである。ヘロドトスは藤縄氏において真に良き理解者を見出したと言いうる。この事は氏が得意とするギリシア神話の分野についても言えると思う。ヨーロッパ特にドイツ語圏の神話研究者にはギリシア文明とそれを継承したヨーロッパ文明の優越性をギリシア神話に求める傾向が強い。ギリシア神話には理想的世界としての神々の世界が投影されていることがその根拠とされている。しかし藤縄氏は半神・半人間とされる英雄を崇高な存在としてその意義を強調しつつ神々の世界と人間の世界という区分を流動化させギリシア神話をより巨視的立場から理解しようとする。氏が日本の神話を低評価した津田左右吉とは異なり日本神話とギリシア神話の間に類似・併行要素を見出していることに注目したい。氏がヨーロッパ世界とくにドイツ語圏で生れた学説、例えばマックス＝ウェーバー、カール＝マルクスに一定の距離を保持していることも興味深い。氏の立場はヨーロッパ世界ではむしろ異端視されたO・シュペングラー、A・トインビー、ラフカディオ＝ヘルンらに近いものがあるように思う。

いま少し叙述を続けさせていただきたい。私事になるが私は今年四月以来、運命の計らいからか、亡くなられた藤縄氏の後任として本学に勤務することになった。研究室も藤縄氏が使用されていた部屋であり、氏が生前購入された書物の多くを引き継ぐという恩恵を享受した。氏の面影を彷彿させる書物を眺めていると若い頃個人的に親しく耳にした事柄が懐かしく想起されてきた。私はその昔、氏にギリシア神話に関して尋ねたく思った一事があった。それは両親と息子の間に見られる、とされる複雑な心理を説明するさいフロイトが引用したオイディプス王物語は神々の世界にのみ見られる象徴的物語であり現実とは別次元の話ではないかという事であった。しかし著名な作家であった母親に対して批判的態度を維持していた藤縄氏に対しこの件を尋ねることは私事に触れる部分もあるかと思い断念してしまった。今にして思うと確信は無いが、氏は深層心理学の大家であるユダヤ人G・フロイトの学説にも一定の距離を置いていたように思えてならない。それは氏の若き日の家庭内体験と重なるとしても、むしろ一貫した研究態度から来るものであったように思える。氏の身辺に漂う孤高的・高踏的な雰囲気・思考様式はそのことを示している。端的に言って氏のギリシア神話研究に見られる迫力はヨーロッパ特にドイツ流の解釈ではなくギリシア神話と日本神話に見られる類似性とそこから来る日

本神話への共感とその援用という態度と深く関わっていると言えよう。

最後にいま一つ言及しておきたい事がある。私にとって藤縄氏の人柄・日常の生活態度全般を知る上で最も簡潔で秀れた論文は氏が史学研究会の公開講演の形で発表し後『ギリシア文化の遺産』（一九九三年、南窓社）の巻頭論文を飾った「世界史の青年期としての古代ギリシア――古典的教養の源泉――」であったと信じている。そこでは永遠に青年たらんとするギリシア市民の姿が多角的側面から具体的に論述されている。それは氏が自らか課した人間の理想像追求の収斂的成果であり氏の研究と日常生活の一体化はこの論考において達成を見たと言える感がする。私にはこの論文は旧制高校のOBにして始めてなしうる成果という思いがある。

藤縄学兄の後任者である小生にとって三年の年齢差を考慮しても氏との距離は余りにも大きい。私に残された仕事は許されれば藤縄氏よりも少しく長生きし、この距離を少しでも縮めることにあるように思う。そしてそれが藤縄学兄の学恩に報いる一助になるのではないかと考えている。御冥福を心からお祈り申し上げる。

Sit tibi terra levis.

（本学教授）

畏友・藤縄謙三氏を悼む

江川良一

藤縄氏長逝の報は私にとってはあまりにも突然であった。それと知った時、葬儀もすでに終ったとの由。氏との訣れがこんな形で現れるとは思いもよらぬ事であった。

藤縄氏とは終戦後間のない昭和二十年代後半、京大西洋史専攻の学生として共に机を並べた間柄であった。その限りでは同級生には違いないのだが、そう言うのが気恥しい位二人の間には懸隔があった。学究一途に着実なコースを歩み、専門の古代ギリシア史では第一人者として嚇々たる業績を遺された氏に対し、私の歩みは紆余曲折、到底比肩するべくもなかったのである。

偶々平成四年、本学全体の改変の中で、東洋史学科から史学科への改組の動きが進み、新設の西洋史コースに一名の定員増が決った。発足時の貴重な一名は生半可な人物であってはならない。その選定には随分頭を悩ませたが、別の同期生の示唆もあって、藤縄氏の京大定年退官の機会を狙って一か八か当ってみることにした。九月下旬の雨催いの夕刻、籠谷真智子氏に同行を願って化野の御宅を訪問。声が出にくくなり健康に不安があるから何処もお断りしていると逡巡の態の所を、些か強引にお願いして、数日後に承諾を得たのであった。当時考えられたこの最良の人事で新史学科の発足が可能になったと言ってよい。

この時の暗黙の約束から氏の体調を考慮し、少くとも無理のない程度のコマ数の鞍配には心掛けたつもりである。その点西洋史コースの専任は私との二人だけだし、元々同期の誼みもあって何一つ問題はなかった。今となっては、むしろ一緒に勤務した期間の短かさを怨みたい位である。氏が専門分野に於る奉斗である事は勿論だが、その著『ギリシア文化と日本文化』に見る比較文化論の見事さ、その根底に

ある日本文化への造詣の深さも並々ではなく、在任中にはこれら幅広い領域で多々啓発を受けたものであった。

手許に西洋史一期生達が私の退職送別会を開いてくれた時のアルバムがある。藤縄氏も同席してにこやかに写っているが、これが氏と二人きりで撮った最後のものとなった。退職後何回か史学科を訪う機会があったが、折しも大学院の改組や新課程増設等の動きの中、氏も相当忙しそうであった。体の方はその後大丈夫なのかなと折々心配はしていたのだが、こんな結果になろうとは。最初に無理強いをした私にも一端の責めがあるのではとの引け目が、今も拭い切れないのである。合掌。

（本学元教授）

藤縄先生を憶う

林田芳雄

藤縄先生は平成五年四月に京女史学科に来られ、私は同九年三月に退いているから、わずか四年しか同僚としておつきあいがなかったが、思い出は尽きないものがある。

嵯峨の景勝地に邸宅を構えているので、京大を退官した後、悠々自適の生活に入ろうとしたところへ、無理遣りにお願いして京女へ来ていただいたように記憶している。

京女史学科は、創設以来四〇数年を経過しても、専攻は日本史と東洋史があるのみで、西洋史はなかった。それまでは、先に永井康視教授、後に江川良一教授が西洋史の授業を担当していたが、学生たちの前で自己紹介をする時は決まって、「先生方の中で只一人ゼミを持たないものですが……」というのが口癖であった。そばでこれを耳にするたびに、寂しい思いをするので、西洋史専攻を何とか創れないものかと考えるようになった。

ちょうど史学科から狩野直禎教授が学長になられたので、学科充実の名の下に積極的に西洋史専攻創設の計画が進められることになり、その実現の年に藤縄先生の来学を迎えることができたのである。

学部の西洋史専攻が実現した後、大学院の西洋史専攻設置計画も継続的に進められた。大学院関連のある委員会で、私は議長（学長）の了解を得て藤縄先生を特別に出席していただき、大学院西洋史専攻を設置する理由を説明してもらうことにした。先生は、声は小さかったが現代社会における西洋知識の重要性や、研究機関として西洋史専攻を設ける必要性について諄々と説き、在座の人たちに感銘を与え、納得させた。学部の西洋史専攻誕生の舞台裏には、数多くの人達の力添えがあったことは言を待つまでもないが、江川教授の果した役割は大きい。同じようなことを大学院の西洋史専攻について言うならば、江川教授のほかに藤縄教授の名もあげる必要があるだろう。そして、このような構想と計画が順調に遂行できたのは、史学科から学長を出したという好条件に恵まれたからだと今も思っている。

先生は律儀的で温厚な方である、という印象が私にはとくに深い。小柄な体で、さほど健康そうにも見えなかったが、時間はきちんと守り、授業も会議も休むことはほとんどなかった。ある時、お茶を飲みながら雑談する席で、外出時に必ず身に付けていないと落ち着かない品物を一つあげるならば、という話が出た。それぞれ眼鏡とか、ペン

とか、鍵などをあげたが、先生があげたのは時計であった。時間を大切にする一面をうかがわせるエピソードである。

時間を大切にする先生が、日本人の平均寿命に達する前に時間に負けてしまったことは、ご本人にとっても無念であったに違いない。時間を超越した無量寿の世界で、これからゆっくりお休みなされることを祈るのみである。

（本学元教授）

藤縄謙三先生をしのぶ

船越昭生

私が、京都女子大学に赴任し、見る見る本に埋もれ、病気入院後も本の整理や搬出に大変ご迷惑をおかけ致しましたのとは対照的に、藤縄先生はいつも、身の回りを綺麗にしておられました。いつ倒れてもよいように、研究室にはあまり置かないようにしていますと言われていましたが、私の退職については大変惜しんで下さいました。

西洋史ご専門であられながら、鳥居本化野という処に住まいせられ、顧みては、京都大学にて教鞭をとられ、お優しい奥様に西洋を語られ、一対の雛のように、幽玄な人生を送られたのではないかと想像いたします。

学校を去る日には、東洋史の皆さんと一緒に、失語症の私を見送って下さいました。私は、未だ遠出や、暑中の外出に自信がなく、先生のご霊前にお詣りさせていただきませず、申し訳ないことです。

温かく接してくださいました藤縄先生はじめ、京都女子大学の関係の皆様に、心からお礼を申し上げたいと存じます。

ご冥福をお祈り致しております。代筆

（本学元教授）

藤縄謙三先生のこと

古賀秀男

藤縄謙三先生と親しくお付き合いできた期間は私の場合は四年間であり、長いというわけではない。しかし先生の古代ギリシア史研究者としての存在を強く印象づけられたときからでいえば、すでに四〇年近くなる。私の脳裏にいまも鮮明に焼きついているのは、まだ駆け出しのころ、先生が大阪府立大学在勤時代に『史学雑誌』に発表された「ギリシアの英雄叙事詩の社会的基盤（上、下）」（一九六四年）である。ホメロスの英雄叙事詩を史料にして、ミュケナイ時代の国制から暗黒時代を経て民主的な社会体制・国制へと転換する状況を読み取り、推論されるという、文化史と政治社会史とを結ぶ斬新な力作であったように記憶している。またこのような力作が村川堅太郎教授をもって知られる東京大学の雑誌に発表されたことにも注意をひかれた。

その後先生は京都大学に戻られ、大著『歴史の父ヘロドトス』に至る多くのユニークな労作を公刊され、私も学会に出席した折に、ときどきお見かけするようになったが、直接面談したことはなかった。その機会が得られたのは、一九九六年十月中旬、思いもよらぬ縁で京都女子大学に勤めることが内定し、初めて大学を訪ねたときのことであった。狩野直禎先生が居られた学長室で初めて藤縄先生とお会いし、

その後学内を案内してくださった。坂道だけでなく、キャンパスに石段、階段が多いというのが京都女子大学の第一印象であったが、その坂や段を、とくに図書館本館書庫のやや難物の階段をすいすいと先導していかれた。幾分健康をそこなわれているとは聞いていたのだが、また酒食の会には出ないことを京都女子大学赴任の条件にしたと語られながら、その夜の会にも付き合ってくださった。心から歓迎してくださったのだと今もかみしめている。

一年余りが過ぎ、私が京都の生活と大学に慣れてきたころから、季節の変わり目にいつも頭が重く、風邪気味で微熱が続くというような身体の不調を語られるようになった。それでも公開講座で私がキャロライン王妃事件の話をしたときには、的確な励ましの言葉をいただいた。学生の卒業論文も実に丁寧に指導されていたし、学問への情熱も並々ならぬお気持ちをもち続けられているのを日々実感していたので、身体の不調に遣る方ない自己を律しがたい気持ちになられることもあっただろうと推察される。しかしまたそれが病を一層つのらせることになったのかもしれない。ご入院中には数回病院におうかがいし、奥様とも親しくお話することができたのは幸せであった。八月下旬に最後に面会できた日のことを、細い声ながらしっかりした口調でご自身のことを語られたときのことを、そして先生にふさわしいしめやかなお通夜の日のことを、生涯けっして忘れることはないだろう。

ご冥福を心からお祈りいたします。合掌

（本学教授）

重い宿題を課せられて

永田英正

昨年の謝恩会の日のこと、会場の控室で藤縄先生と隣り合わせになった。談たまたま先生の最近のお仕事に及び、目下トゥキディデスの『歴史』を翻訳しているとのことであった。「出版を楽しみにしています」と言ったのが、藤縄先生と交わした最後の言葉になってしまった。日ごろ授業などでお疲れの様子を見てきていただけに、もっとご自身のお仕事に専念させてあげられなかったのかと、残念でならない。

ところで私自身、藤縄先生から重い宿題を課せられたと自覚していることがある。それは今から三年前の一九九八年夏期休暇に入るころに溯る。この年度の後期の史学概論を担当することになっていた私は、授業で「人は何故歴史を書くのか」という視点から、中国の司馬遷、アラブのイブン・ハルドゥーン、ギリシアのヘロドトスらを取り上げてみたいと考えていた。司馬遷と『史記』はともかく私の専門であり、またイブン・ハルドゥーンについては畏友森本公誠氏訳の『歴史序説』（岩波書店、一九七九年）を読んでいたので、大体の構想はまとまっていた。問題はヘロドトスであった。そこでヘロドトスの『歴史』（松平千秋訳、岩波文庫）を読み始めたのであるが、中国史書の所謂紀伝体や編年体の叙述形式に慣れてしまっている私には、まるで迷路に入り込んだも同然で、話の筋がさっぱり辿れないのである。ヘロドトスの『歴史』を読むには、それなりに読み方の手ほどき

を受ける必要のあることを痛感して、藤縄先生の著書、中でも『歴史の父ヘロドトス』（新潮社、一九八九年）を求めることにした。ところがこの本は出版元の新潮社は勿論のこと、あちこちの古書店にも問い合わせてみたが、何処にも無いのである。そんな或る日、史学共同研究室で藤縄先生に出合った折に、ご著書を捜していることを話したところ、「あれは無い本です」とのことであった。やはりそうであったかと、本を求めることを諦めていたところ、数日して先生が研究室に見え、「これを上げます」と言って例の本を差し出されたのである。話を伺うと、どうも先生手持ち分の中の最後の一冊のようであった。私は一時拝借するだけで結構ですと再三辞退したが、君に上げるために持って来たのだからとのこと。これ以上固辞しては反って失礼になると思い、私はその貴重な一冊を有難く頂くことにした次第である。

一読して目から鱗の落ちる思いであった。「あとがき」によると二〇年にわたる研究の成果というだけあって、ヘロドトスの『歴史』の見事な整理と再構成に敬服したことは言うまでもない。

ところでご著書の第五部、第八章の中に「司馬遷との比較」という一節がある。その中で藤縄先生は、川勝義雄氏の『中国人の歴史意識』（平凡社、一九八二年）を取り上げ、川勝氏の司馬遷を以てヘロドトスとは比較にならない存在であるとする評価にたいして、厳しい批判の言葉を述べておられる。川勝義雄氏は、私が大学院生の時期から懇意にしてもらい、氏の著述の中でも特に司馬遷や『史記』に関係したものは殆ど読んで大いに学恩を受けてきた、私の尊敬する大先輩である。それだけに藤縄先生の批判の言は、私にはかなりショックであった。この批判にたいして、川勝氏はどのように反論したであろうか。こう考えたとき、はたと思い当たったのである。というのは、川勝氏は一九八四年に急逝されていて、この世の人ではない。もしかすると藤縄先生は、川勝氏に代って私に反論することを課せられたのではなかろうか。貴重な最後の一冊を下さったのも、そのためではなかっただろうか、と。よしんば藤縄先生にそうしたお考えは無かったとしても、本を頂いたからには、これに応えるのが私の責務であると、このとき自覚した次第である。

とはいえ、これは容易なことではない。授業の方は何とか終えたが、宿題は結局お見せ出来ないままに藤縄先生は他界された。しかしお亡くなりになっても宿題を果たさないかぎり、藤縄先生は私の脳裏から消えることはないであろう。

（本学教授）

思い出すこと

中山　清

藤縄先生は新潟県高田市（現上越市）の御出身である。高田は江戸時代には越後を代表する城下町であり、近代においても頸城平野部の中心都市として発展した。現在、城址には内堀の一画が残り、堀をめぐる城址公園は桜の名所である。旧制中学から新制高校への変動間もない時期、先生もたびたび逍遙されたのではなかろうか。

頸城平野部は所有地価一万円クラスを中心として多数の大地主が存在していた地域であった。先生は「私の家は大したことはなかった」

と話されたが、明治中期の中頸城郡地租十円以上納入者名簿を繰っていくと、浜方の村に藤縄姓を見い出すことができる。珍らしい姓だから、姻戚・一族ででもあったのであろうか。

ここ数年来、江戸期に生成し、近代には所有地価約四万円、頸城地方第三位の巨大地主であったお宅の旧蔵史料調査を続けている。そのことをお話ししたら、小学生の時、そのお宅の庭に遠足で行ったことがあると懐かしそうな顔をされた。今は無い頸城鉄道という軽便があった頃の話である。

調査の一環として高田市立図書館所蔵史料を見たことがある。その折、暇をつくって城址公園を一周した。緑陰に『赤い蠟燭と人魚』などの作者の小川未明の碑を見つけた。彼も高田の出身である。先生が遠くギリシャ古代の文化に思いを馳せた背景に、このような故郷があったのかと感じたことを、今思い出している。

（本学教授）

藤縄先生の眼差し

植松　正

京都女子大学に赴任して心嬉しいことのひとつは藤縄先生との出会いであった。もっともここ二、三年は先生もかつての元気を失われたようなところがあって、先生も抑制されるご様子だし、こちらもお気の毒な感じがして遠慮するしで、あまり闊達にお話もなさらなかった。しかし私が赴任して間もない頃には、気さくに先生ならではの観察や所見を披露されることもあって、ずいぶん感嘆したり納得させられたりしたものだ。

まず私の想いの第一は、先生がいかにも京大の学風のなかから生まれた文明史家であったことだ。今日的な眼差しから出発しながら、遠い過去の事象を実証的に観察して、鋭く本質を衝こうとされたように思う。『ギリシア文化と日本文化』を頂戴した。先生はみずから、なぜあゝいうものが書けたのか不思議だみたいなことを言われた。先生は大学紛争のときには、普段とは毛色の違うもの、わけても日本のものをよく読まれたそうだ。現在を生きながらの観察眼が限られた学問領域を飛び越えて、自由な発想を助長したのだろう。「あの当時は三島や川端が自殺したりして、日本的なものの危機だったんだ」のお言葉は焼きついて離れない。それに先立つ戦争体験も、先生の世代にとってはきわめて重大なものであったはずだ。

大学の公開講座でのお姿も忘れがたい。テーマは「ヘレニズムとヘブライズム」。深い学殖に裏打ちされたご講演だったが、家畜・動物の図像やレリーフを紹介しながらのお話は、一般の聴衆をも十分にうならせるものだった。先生には地味な話しぶりのなかに、失礼な言い方になるかもしれないが、素人を「アッ面白いな！」と惹きつける力があった。ご講演は論文にまとめられ、『史窓』第五六号に、しかも拙論のちょうど前に接して掲載されたから、私はひそかに喜んでいた。

学生の教育実習の巡回指導に廻らなければならない。ゼミ生が授業でヨーロッパ古代・中世を扱うと聞いて、なにか勘どころを教えてくださいとねだった。先生が仰られるには、古代の都市は西洋独自のもので地主が主体、中世都市になると商人が住むようになり、それが市

民革命の原動力に発展するのだと。「それ、いただいておきます。」この上ない賜り物であった。

漢文はもともと好きでなかったが、京大で吉川、貝塚、宮崎の諸先生のものを読むに及んで、もっとやっておけばよかったと思われたとか。大阪府立大学で助手から講師になったときに授業を担当した。その授業が漢文の講読だったという。なにをやったんですかとお尋ねすると、『論語』だと言われる。「あれなら注釈書も色々あるからね」と、ちょっとはにかみの眼差しを向けられた先生だった。（本学教授）

忘れられない紅茶

瀧浪貞子

日本史を勉強しているわたくしが、藤縄先生と親しくお話をさせていただくようになったのは数年前、平安京の西市址から多数の銭がまとまった形で出土したとの新聞発表がきっかけであったように思う。平安京の西市は右京（七条）に置かれた官営のスーパーマーケットで、左京（七条）にあった東市に対して早くに廃れたことから、西市の出挙銭所（いまでいう政府経営になる庶民相手の金融機関）で死蔵されていた銭ではないか、との話題をよんだ。その現地説明会に出かけられた先生は、「日本史は現地を確かめられるのが強みですね」と大変興味深そうに話されていたのを今でも鮮明に覚えている。

その後、同種の説明会なりシンポジウムがあるたびに、わたくしに声をかけて下さり、わたくし自身、先生から大いに学問的刺激を受けたものだった。

そんな先生がある日、額に疵をつけて研究室に入ってこられた。お尋ねすると、階段（地下鉄の階段だったか？）から落ちて出来た疵とのこと。初めて経験されたことらしく、「これまで足には自信がありました。それだけにショックです。それも頭から落ちたのでダブルショックでした」と淋しそうにおっしゃられた。階段を踏みはずしたり、足をすべらせたりしたのならともかく、頭から落ちたということが先生には大きな衝撃であったのだと思う。その頃から、先生はご体調も崩されたように記憶している。いつお尋ねしても風邪気味で熱があるとおっしゃるようになったからである。しかしわたくしから見れば、それまでのご様子とあまりお変わりになったとは思えず、廊下でお見掛けした折りなどつい、お元気そうに見えますが、と申し上げたのだが、先生はいつも「そう見えるだけですよ」と、ひと声おっしゃるだけであった。以来、平安京の話もほとんどされなくなった。

平安京にご関心をお持ちの先生に関して忘れられないのが、女子大への通勤についておっしゃられた言葉である。先生は嵯峨鳥居本（右京区）化野から女子大に通われていた。東山の麓にある女子大は、いうまでもなく鳥辺野の葬送地として知られるが、それ以上に著名なのが嵯峨野の化野であった。『徒然草』に、「あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果つる習わしなれば、如何に、物の哀れなからん……」と記されるように、平安時代以来、鳥辺野・蓮台野とともに葬送地とされたところである。そのことを先生は真顔で、「私はお墓のある所に住み、通っているのもお墓です。だからいつもお墓にいるような気がしています」とおっしゃられたことがあ

る。先生特有のユーモアであるが、その時わたくしは妙に納得したものである。

その先生のお宅に初めてお伺いしたのは二年前、粉雪の舞う冬の日であった。寒かったでしょうと、先生自らが入れて下さった紅茶の、温かくて美味しかったこと、それがつい昨日のことであったように思い出す。わたくしにとって生涯忘れられない紅茶となった。

先生のご冥福を改めてお祈りいたします。

（本学教授）

藤縄先生の「ご遺言」

常松　洋

二〇〇〇年四月二十八日、先生から共同研究室に電話がかかってきた。声が出なくて講義ができず、休講するとの連絡だった（たしかに、ひどい話し声だった）が、ふと思いつかれたように、「ところで、君は京女に移ってきてよかったですか」とお尋ねになった。もちろんよかったと思いますと答えておいたが、五月七日に入院されてから、何度かお見舞いはしたものの、実質的にはこれが先生との最後の会話になった。お亡くなりになって、改めて何をおっしゃりたかったのか気になり、あれこれ考えるうち、ご自分に対する発問ではなかったのかと思い至った。晩年の先生につきまとっていたように思える、自分がこの大学にいてよいのだろうかとの疑問が、そのような問いになったのではないかと。

先生は京都大学を最後に教壇から身を引こうとされていたし、実のところ、退職のご意志をうかがってもいた。といって先生に、京都女子大学への不満、とりわけ学生に対する不満があったわけではない。先生の後任として京都大学に着任された南川教授によれば、ご存命中に、うちの学生は期待していた以上によく頑張ると話されていたそうだし、僕自身、そのような評価を耳にしたこともある。先生が悩まれていたのは、今の学生にとって自分は老いすぎたということにあった。とくに本学ご着任以後、聴力がとみに衰えてしまい、講読や演習で学生に迷惑をかけることを気にされていた（補聴器も試されたようだが、使い勝手が悪かったためだろう、ほとんど装着されていなかった）。

せっかく学生が研究の成果を発表しているのに十分な指導ができない。このことに、先生は悩まれていたのであろう。学生時代はもちろん、京都女子大学に赴任してからも、藤縄先生は恩師であり続けたから、たとえそのような悩みを打ち明けられたとしても、なんともできなかったろう――せいぜいが、もう少し、ご辛抱されて頑張って下さいと言うしかなかった――し、そもそも、ご自身の事情や都合を強く押し通される方でもなかった。それだけに、あの問いかけにこめられていたであろう先生の煩悶が、今になってみるとよけいに重く鮮明に伝わってくる。先生、教員も学生も先生にご着任いただいて、とても感謝しておりますし、ご回復を祈念しておりました。そんなにお悩みになることはなかったのではありませんか。

（本学教授）

藤縄先生の思い出

檀上　寛

藤縄先生が逝かれて早一年が経つ。専攻を異にする先生とは短いお付き合いであったが、先生の謦咳に接し得たことは大きな幸せであった。

私が学生であった今から三十年近く前のこと。すでに先生のご高名は、東洋史の一学生に過ぎない私も存じ上げていた。しかし、必ずしも勉学熱心であったとは言い難い私は、先生の講義を受講することもなく卒業し、高名な学者としてのお名前だけが心の片隅に焼き付けられた。

京女大に西洋史コースが新設された一九九三年。京大を退官された先生は、懇請されて史学科に赴任された。思いがけない先生との邂逅であった。しかも先生の研究室がたまたま私の隣室であったため、一気に身近な存在となられた。今まで学生の目線で仰いでいた方と同僚になるのは、初めての経験であり、何とも名状しがたい不思議な気持ちを抱いたことを覚えている。

先生は赴任された当初、国立大と私立大との違いに戸惑われたのか、京女大では先輩に当たる私に、学内の諸事についてよく質問された。当時、私は史学科で最年少であり、また隣室のよしみもあり、先生としてはさほど気兼ねなく尋ねられたのだろう。こういうこともあって先生とはお話する機会も増え、史学科の共同研究室で先生が休憩されている時など、いろいろと質問させていただいたものである。

先生はご専門の分野だけでなく、あらゆる領域に関心を持たれ、差し上げた抜き刷りにも必ず目を通され、コメントを下さった。ある時、『史窓』掲載の拙稿に寸評を加えられながら、次のように呟かれたことがある。

「最近はこのような大上段に構えた論文が少なくなりましたなあ……」。

そのお言葉が、もっと実証面での努力をせよとのお叱りであったのか、あるいは励ましであったのか。それを確かめる間もなく、先生は風のように去って行かれた。もはや先生の真意をお聞きできないことが悔やまれるが、先生の無念さに比べれば取るに足らない感慨だろう。おそらく先生は、まだまだやるべき仕事を残されていたに違いない。それを思うと先生の突然のご逝去は、かえすがえす残念でならない。今はただ先生のご冥福を心からお祈りするのみである。（本学教授）

藤縄先生の〝最後の論説〟と その〝歴史意識〟

坂口満宏

藤縄先生が最後にお書きになったもの、または最後に公表されたものは何だったのだろうか。『史窓』第五八号「史学科創設五十周年記念特集号」にお書きくださる予定だった論考「古代ギリシア史学における戦争の役割」は、すでに原稿が出来上がっていたのかもしれない

が、仮題を頂いたままで掲載には至らなかった。

では、あらためて何が藤縄先生の〝最後の論説〟なのだろうか。おそらくそれは一九九九年三月三十日の発行にかかる『日本歴史学協会年報』第一四号に収められた公開講演の要旨「古代ギリシア人の歴史意識について」であることだろう。その講演とは、九八年七月十八日、京大会館において開かれた日本歴史学協会（以下、日歴協）の総会にともなうもので、長沢和俊氏と共になされたものであった。

私事に及ぶことだが、日歴協の総会案内を受け取り、そこに講演の講師として藤縄先生の名前を見出したとき、正直なところ「おやっ」と思ったことを今でも覚えている。藤縄先生と日歴協との結びつきが即座に連想されなかったからである。ともあれ私はその講演会場に足を運んでいった。

会場で配られたレジュメのタイトルは「ギリシア人の歴史意識」で、その冒頭には「詩は歴史よりも哲学的で重厚である。詩はむしろ普遍的なことを語り、歴史は個別的なことを語るが故に」という『詩学』（アリストテレス）の一節が引かれていた。藤縄先生の問題関心はこういった発言にいたった〝古代ギリシア人の歴史意識〟の本源を改めて確認しようとするもので、あわせて十九世紀半ばのドイツ哲学者たちによって唱えられて以来一〇〇年あまりにわたって流布した「歴史の思想はギリシアには欠如し、キリスト教によって与えられたもの」という評価の影響力とその歴史性を語ることであった。以下、同年報に収められた先生の〝最後の論説〟を紹介しながら、その〝歴史意識〟に及びたいと思う。

右の関心を明らかにするために藤縄先生は、具体例として「明治以来」の日本人に影響をあたえたであろう釈迦、孔子、ソクラテス、イエスといった「世界の四聖」、さらには日本の聖徳太子を加えた「五聖」の描かれ方、伝記での語り口をとりあげ、その描かれ方の中にそれぞれの「文明の特徴」を見出していく。そのねらいは、それぞれの「聖人」の描かれ方を比較するなら「世界の四聖」または「五聖」のなかで「ソクラテスだけが歴史と無関係だ」ということが際立つからである。なぜなら釈迦においても孔子にしてもその生い立ちから成長の過程、思想形成の推移がその時々の王の事跡と重ね合わせて語られ、イエスの場合も『ルカ伝』において顕著であるようにその活躍はローマ帝国内の歴史的事件として扱われ、聖徳太子の伝記においても『日本書紀』に基づく年代記の枠組みのなかで太子の生涯が語られるのだが、ひとりソクラテス伝においてのみ、その生い立ちから説かれることはなく、その多くは哲学者として完成してからの生活や流儀を、しかも年代順ではなしに雑然と並べられているからである。

なぜこうした違いがあらわれるのか。先生はその要因をそれぞれの民族が体験した歴史の特徴にあるとし、古代ギリシア人とヘブライ人、中国人の歴史的体験の違いへと論を転じていく。すなわちギリシアでは紀元前一一〇〇年頃にいたると政治社会に混乱が起こり、文明は崩壊し、その後三〇〇年から四〇〇年にわたる「暗黒時代」となり歴史に大きな断絶が生じていったが、同時期のヘブライでは統一国家が形成され、族長時代からモーゼの活躍を経て士師時代にいたる過去が記憶されるようになり、王国時代の歴史と結びつけられるようになるからである。同様に中国においてもその歴史は連続的であり、大きな変動期とされる春秋戦国時代といえども諸子百家の時代であり、あ

る意味では黄金時代であった。そこにギリシア人が体験した歴史とのあいだに大きな違いがあるのだ、と。

さらにギリシア人の歴史意識に大きな影響を与えたものとして、古代ギリシア人が最後まで統一国家を形成せず、多数のポリスとして分立していた歴史事実を指摘する。なぜなら統一国家を形成した民族は必らず帝王の治世年次によって年代を表示しようとし、帝王の加齢過程をして歴史の年々の経過を不可逆的なものと決定づけるが、統一的な暦法が成立しなかったギリシアでは年々の経過は循環的なものとして意識され、自然界の時間と同じになるからだ。当然、ギリシア人の歴史意識では「ローマの建国」といった国家を基準とした歴史の起点がないことになる。

その後ギリシアはローマの属州となり、自らをローマ人と称するようになったギリシア人は異教徒時代のギリシア人について語ろうとしなくなり、ここに更なる歴史意識の断絶が生まれていった——。

このように藤縄先生の〝最後の論説〟を読み直してつくづく感じることは、その題名こそは「古代ギリシア人の歴史意識について」だが、そこで語られていることのすべてが先生ご自身の〝歴史意識〟そのものであろうということである。長年にわたって先生が古代ギリシア史研究に情熱を傾けられた一半には、戦争体験はもちろん、皇国史観に代表される歴史意識に対する強い違和感と反省がこめられていたことは想像に難くない。この講演がなされた時は日本においても自民族中心的な歴史像が強調されはじめた頃でもあった。そうした時代であったからこそ、外部世界に開かれていた古代ギリシア人の歴史意識に思いを馳せることの大切さ、「帝王の治世年次」と自己の生を重ね合わすことのない歴史意識の可能性に注目されたのもむべなるかなである。藤縄先生の〝歴史意識〟は文字通り、古代ギリシア人のそれを〝鏡〟として映し出され、語りつくされたように思えてならない。

（本学助教授）

ギリシア語とイスラーム時代研究

谷口淳一

藤縄先生と直接お目にかかってお話ししたのは、私が京都女子大学に就職してからのことであるが、先生が前任校の京都大学で教えておられた時期に私は学生として在籍していたので、あるいは構内のどこかですれ違っていたかもしれない。西南アジア史学を専攻した私は、大学院に進学してから地中海東岸のシリア地方に興味を持ち、修士論文では十～十一世紀のシリア北部の歴史を扱った。この時期のシリア北部はイスラーム勢力とビザンツ帝国間の境域に位置し、そこでは一進一退の領土獲得戦争が繰り広げられていた。しかし両者の間には、互いに使節を交換したり亡命者を受け入れたりと、戦争以外にもさまざまな交流が見られたのである。イスラーム世界側からシリアを眺めていた私にとってビザンツ帝国は未知の世界であったが、勉強を進めるにつれてビザンツ帝国の存在感は次第に増していった。

ビザンツ帝国について詳しく知る必要を実感した私は、博士後期課程に進学すると、まずはギリシア語の習得からと、張り切ってギリシア語の初級コースに出席した。この志を貫徹していれば、あるいはそ

の翌年には藤縄先生の文献講読の授業に参加していたかもしれない。しかしその年のうちに私のギリシア語習得計画は挫折してしまった。古典ギリシア語は格変化や動詞の変化が多いぶん語順がかなり自由である。それゆえギリシア語文の読解にはパズルを解くような面白さがあるが、私にとってはかなり大変な作業であった。古典ギリシア語はビザンツ時代のギリシア語とずいぶん違うということであったので、時間と労力に見合うほどには自分の研究に役立たないだろうというもっともらしい口実を考え出し、途中で投げ出してしまったのである。

藤縄先生のご専門は古典時代のギリシアであったが、ヘレニズムの影響を受けた土地であるシリアにも関心を寄せておられた。しかも、ヘレニズム時代だけでなく、ローマ・ビザンツ時代を経てイスラーム時代のことまで知らねばならないとおっしゃっていた。また、これらの時代の区切りを超えて、歴史を連続して捉えなくてはならないとも話されていた。藤縄先生が私を諭すつもりでおっしゃったのかどうかはわからないが、ギリシア語やビザンツ世界の勉強を中途半端にしたままの私にとっては耳の痛い言葉であった。

イスラーム以前との連続をおさえたうえでイスラーム時代の研究を進める——頭では解っていてもなかなか実行できない重い課題である。さてどうしたものであろうか。

（本学助教授）

拝啓藤縄謙三先生

山添典子

いかがお過ごしですか？　先生が旅立って行かれたことを知った時は、大変驚き、大変寂しく思いました。そちらでは花が咲き乱れ、いい香りが漂っていることと思います。きっと今も大好きな研究を続けておられることでしょう。

先生に初めてお目にかかったのは、入学式の時でした。先生もちょうどその年から京都女子大学へ来られたのでしたね。挨拶をされていた先生は、自分は以前、ほとんど男子学生ばかりの学校にいたのでこんなに多くの女性の前で話すのは少し恥ずかしい、と下向き加減に照れながらおっしゃっていたことを鮮明に覚えています。でも、そんな先生も授業ではとてもはっきりした口調で、まっすぐ前を見据えて力強く講義なさいました。その姿を見て真の研究者というものを感じ、周りの友人達とも常に驚き尊敬していました。

大学院進学については先生にもいろいろアドバイスを頂きましたね。ありがとうございました。ゼミ生ではなかったので日頃は余りお話しする機会はなかったのに、親身に丁寧に応えていただきました。大変うれしかったです。また、先生はお忘れかもしれませんが、私の大学院入学時の歓送迎会に出席してくださいましたね。例年、先生はお体のため、お酒の席にはお出にならないと聞いていました。でも、私が初めての西洋史の院生として入学できたので、わざわざ出席して

くださって（と勝手に思っているのですが）、先生の優しさを知り、とても感動しました。

先生、そちらではお友達は見つかりましたか？古代のギリシアの人々と会って、討論されたりして楽しく過ごされているといいなと思います。私は歴史からは少し離れた仕事に就いてしまいましたが、知識を得る意欲は欠けていないつもりです。まだまだ勉強不足なのでそちらへ行ける資格はないです。もっともっと勉強できるように見守っていてください。よろしくお願いいたします。ではまた。敬具

（一九九八年度修士課程修了）

藤縄先生の思い出

鴨井佳奈（旧姓　山本）

この度、恩師藤縄先生の突然の訃報に、まさに青天の霹靂といった感でぼう然としています。

私は、西洋史専攻の第一期生になります。藤縄先生も、京都大学を退官後、我が校にいらっしゃって初めて受け持たれる卒論ゼミでした。

当時の私は大変悪い学生で、所属していたクラブ活動にばかりかまけていました。その上生来の優柔不断で、卒論のテーマがなかなか決められず、とうとう中間発表直前に先生に泣きつく破目になりました。先生はびっくりされて、あわてて何冊かの本を貸して下さいました。

そして発表当日、他の方々の発表はゆったりと聞かれていた先生が、私の番になると、あのつぶらな瞳をまんまるくさせ、唇をキュッと結んだ緊張した面持ちになられたのを思い出します。

案の上、卒論の提出もぎりぎりでした。締切時間寸前に先生の部屋に飛び込むと、奥に座っていらっしゃった先生がガバッとお立ちになり、「やっと来ましたか。もう来ないかと心配しました。早く行って」とポンポンッと判をついて私を追うように送り出されました。その後の予餞会でも「あなたには本当にドキドキさせられた」と何度も何度もおっしゃいました。あの悠々とした雰囲気の先生を本当に大あわてさせた学生でした。一年目にこんな出来の悪い学生を持って、次の年からはきっと厳しいゼミになったろうと危惧しています。

卒業後は、結局一度もお会いする機会を持たずに過ごしていました。しかし出来の悪い学生は学生なりに先生をお慕いする気持は強く、いつかもう一度お目にかかりたいと思っておりました。最近、今夏にギリシア旅行の計画を立て始め、それにつられパンアテナイア祭典などの先生の講義を懐かしく思い出し先生に一度連絡を差し上げてみようか、などと思っていた矢先の訃報でした。すでに亡き人とも知らず何と悠長な事を考えていたのか、こんなに早く恩師を亡くすとも思わず不義理のまま終わってしまったと後悔するばかりです。せめて、この紙面で感謝の気持をお伝えできれば幸いです。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

（一九九五年度卒業生）

藤縄先生に感謝の気持ちをこめて

小山佳子

私は、平成七年度卒で、丁度文学部東洋史学科に西洋史専攻が出来た一期生で、藤縄ゼミでした。（大学にはいるまで実は西洋史を勉強したことは無かったのですが、三年間の授業から西洋史が一番面白く感じ、また藤縄先生や江川先生を始めすばらしい教授におしえていただいたことから、四回生では西洋史を専攻しようと決めたのです。実際基礎がないのも同然ですので不安も大きかったのですが、逆に色々な説等などにおいてよけいな先入観をもたずにとりくめたように思います。）

藤縄ゼミは最初の西洋史専攻ゼミということで、藤花祭でも藤縄ゼミのベビーカステラという名前でバザーをするなどまとまっていました。

先生の講義は、古代ローマの元老院制やカエサルについて、また聖書について、などをご教授いただいたのですが、先生は声があまり大きくなく淡々と進められるので、たいへん教室は静かで、みんな耳を澄まし集中して受けていたことがとても印象に残っています。

卒論では、当然洋書を読まねばならず（英語も苦手なのです）、そんな私に、藤縄先生は文献の紹介、指導を根気よくしてくださいました。先生はいつも頬に指をあてるしぐさをしながら一言一言言葉を選んで指導してくださったこと、「本当に学者さんだなー頭の中にはどれほどたくさんの知識が詰まっているのだろう」と思い、自分の無知を恥じながら質問をさせていただいたことが今でも懐かしく思い出されます。私の未熟な論文に対して、口頭試問では確か、「よく調べたね」と言ってくださいました。実際は簡単な質問にも答えられなかったのですが……。なんども教えを乞いに部屋を訪れたので、それを思って言ってくださったのだと思います。

最後に藤縄先生のご冥福をいのりながら、最初の西洋史専攻の卒業生として送り出してくださったことに敬意と感謝の気持ちをささげます。

（一九九五年度卒業生）

偉大な先生を偲んで

森田洋子

私は、子供の頃から「大学生になったら必ず古代エジプト史を勉強するのだ」と強く願っておりましたが、生憎エジプト学のある大学に合格することが出来ませんでした。しかし、西洋史学専攻が新設される京女に入学し、一期生という不安を覚えながら、古代ギリシア史の先生をお迎えすると聞き、エジプトの研究も出来るかも知れないという期待を胸に、迷わず西洋史学を選択しました。

ところがどうでしょう。藤縄先生の講義を受講すればする程ギリシアの魅力に取り付かれていき、先生の一言一句も聞きのがしたくないと思うようになりました。そして、私の子供の頃からのエジプト史への想いは覆されることになってしまいました。先生の講義は私にとっ

て、それ程素晴しく、また魅力のある授業でした。藤縄ゼミに入ってからは、講義後に研究室に行っては、先生がギリシアで暮らしていらっしゃった頃の話を聞いたりしたものです。私達がギリシア旅行する際も、色々な情報を教えていただきました。

藤花祭の時には、先生のお名前をお借りして『KENZO』というベビーカステラのお店をゼミから出店する事になり、先生は「私も買いに行って協力します」と、はにかみながらおっしゃったり、卒業時に私たちがプレゼントしたネクタイとピンを「妻にちょっと派手じゃないかと言われました」と照れながらもちゃんと身につけて来て下さったり、皆で白浜に旅行した時には、当時山羊の研究をしていらっしゃったので、興味津々に動物園でご覧になったり、又、ご夫婦でご自宅に招いて下さったりと、そんな愛らしい穏和な方でした。

しかし、研究となるとやはりシビアな面をお持ちで、私の卒論の書き始めの頃は、「それでは論文とは言いません」等、何度か却下され悩んだ事もありましたが、先生のご指導の下で何とか仕上げることができ、口頭試問の時の第一声が「力作でしたね」だった感激が今でも忘れることができません。

私が充実した大学生生活を送り、今こうして京女に進学してよかったと断言できるのは、藤縄先生のお陰です。この感謝の気持ちを先生に直接伝えられなかったのがとても残念でなりません。

それでは、藤縄先生のご冥福をお祈りしつつ、締めくくらせていただきます。

（一九九五年度卒業生）

ゼミ旅行

米田瑞穂（旧姓　岡田）

私は今年に入って友人から送られてきたメールで藤縄先生のことを知りました。卒業してからほんの数年しか経っておらずまだまだ大学生活が記憶に新鮮に残っているせいか本当に驚きでした。

藤縄先生の講義といえば、話がなかなか先に進まず、といっても学生のせいではなく、一つの歴史的な出来事に対して深い部分まで掘り下げた話をされるからなのですが、淡々とマイペースで寄り道しながらの講義は非常に興味深いものでした。私の友人のノートは事細かに書かれていて普通の参考書には絶対に載っていないような中身の濃いノートに仕上がっていました。

そしてもう一つ先生との大きな思い出はゼミのメンバーでの卒業旅行です。同じ藤縄ゼミの友人のおかげで白浜に宿泊の予約がとれたのでお誘いしたところ気持ちよく参加してくださいました。いつも京女の坂を元気にすたすたと登ってらっしゃいましたが、寒かったこの日も白浜アドベンチャーワールドの中を私達と一緒に楽しく歩いてまわりました。旅行から帰ってすぐにお手紙をいただきました。私を気遣う言葉と自宅に遊びに来ないかというお誘いのお手紙でした。せっかくのお誘いだったにもかかわらず仕事に追われていたせいか訪問できなかった事が悔まれます。

お世話になった藤縄先生に心から御冥福をお祈りします。

（一九九五年度卒業生）

藤縄謙三先生を偲んで

菅　森　陽　子

わたしが実際に藤縄先生と接する機会のあったのはたった二年間という短い期間でした。しかし、藤縄先生はわたしにとって尊敬する恩師であると同時に、ひとりの人間としてもとても魅力のある存在でした。

一、二回生の頃は先生の講義を受ける機会がなく、いかにも学者然として近寄りがたいというような印象を持っていました。ですから三回生から藤縄先生のゼミを選択することになり、最初はその一種独特の雰囲気と古代ギリシア史の大家であるとの意識から、そんなに偉い先生のゼミでうまくやっていけるのかという不安と、どんな方なのだろうという期待とを抱いていました。初めは近寄りがたい感じもありましたが、卒業論文にかかり始めてからは先生とお話する機会も多くなり少しづつ親しみを感じるようになりました。先生のお部屋を訪ねるのは最初の頃はとても緊張しましたが、徐々に楽しみに思う気持ちの方が増していきました。先生の深く広範な知識に基づく意見はとても興味深く、またわたしにとっては思いもかけない切り口からの意見を頂くこともありとても勉強になりましたし、その独特の感性から繰り出されるお話など、思いもかけず楽しいお話を伺うこともありました。またある時、部屋の電気は消えているのですがもしかしたらと思ってノックをしてみたら先生がいらっしゃって驚きました。先生はゼミや講義のある前後の時間はたいていお部屋にいらっしゃって、いつも学生を待っていて下さるのだと恐縮し、それ以降はますます先生のお部屋を近くに感じるようになりました。その頃に先生に「あなたのように積極的に来る人はこの学校ではめずらしいね」と言われました。先生のお部屋はいつもしんと静かで、独特な雰囲気がありました。しかしある日のお昼頃伺ったら、食欲がないからと大福をほおばっていらっしゃって意外に思いましたが、後に亡くなられてからお宅に御焼香に伺った時に、奥様にその話をしたら甘いものの好きな人だったからと笑っておられました。一度ゼミで数人ずつ先生のお宅訪問をさせて頂きました。庵（いおり）という雰囲気の先生らしいこぢんまりとしたとても居心地のいいお宅でした。本棚には先生と奥様の専門書などが溢れており、そして奥様も素敵な方で本当にお似合いのご夫婦だなと思いましたので、いつかこんな風な夫婦になれたらとふと思いました。

わたしは就職が決まるのが遅かったので、卒業して三ヶ月くらい経った頃に就職が決まり、その時に先生のお宅に電話したのが先生と話をした最後でした。「苦労したことは無駄ではない。おめでとう、がんばりなさい」と言って下さりとてもうれしく思いました。

先生が亡くなられたとの話を知った時は、またそのうちに先生とゆっくりお話をしたいなと思っておりましたので、残念でなりませんでした。

短い期間でしたが、藤縄先生との出会いはわたしにとってはかけがえのないものでした。

（一九九八年度卒業生）

『森』を見よ

松本神奈

「古代史や中世史は時間の区切りが大きい分、歴史を捉える事ができる。木一本一本ではなく、大きな森でもって歴史を見ることができる。『森』を見ることができる」。

藤縄先生が生前、ゼミの時に話してくれた言葉で、静かに細くポツポツと出されたこの言葉は当時重く心に残り、先生が亡くなったと聞いて以来、より象徴的に強く記憶に残っている。

昨年十月、ゼミ長からの連絡は懐かしいというよりあまりにも唐突だった。声を聞くなり猛烈に悪勘を感じた。予感は的中した、「藤縄先生が亡くなられた……」と。

藤縄先生が私達のゼミを持って下さった時から体調が優れなかったのは分かっていたが、やはりショックだった。ショックと同時に、悔しい気持ちで一杯になった。

昨年の卒業式の時、まだ就職が決まってなかった私は、調子よくいやに明るく「就職が決まりましたら真っ先に先生にお知らせします」と藤縄先生に伝えていた。

しかし、私は臨時職員とはいえ就職したにも関わらず、藤縄先生に伝えていなかった。当時まだ入社して間無しで、仕事も合っているのか続けられるか分からないし、とにかくあくせくしているか泥のように寝ているかどちらかなので、落ち着いたら連絡しよう……、そう思って先生への連絡を後手に回してしまっていた。それが、そんな自分が悔しかった。

でも、幾ら悔やんでも先生はもどって来られる筈はない。「そうだ、あくせくしている所を見てもらうんだ」と自己暗示をかける事によって、無念さを紛らわせた。

あれから一年近く経とうとしている。藤縄先生を思い出す度、あの『森』の話を思い出す。でも私自身は未だ『森』を見渡す事ができていない。目の前の『木』とばかり格闘している。周りの苗木が倒れているかも分からない。いつか『森』を見たい、それは私には一生の課題かもしれない。

戦争を匂わせる悲惨なテロ事件が連日騒がせている。私も当日旅行の為アメリカの他の地に居たが、そこでアメリカの混乱を見た。どの行動が正しいか私には分からないが、どれも『木』しか見ていない気がする。『森』で見たらどう映るのだろう?先生はどう見られていますか?

藤縄先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（一九九九年度卒業生）

歴史への情熱

瀧岡沙織

月の流れは早いもので、藤縄先生が永眠されましてから、もうすぐ一年がたとうとしています。もうそんなにたつのかという驚きと共

に、先生が今も生きておられたらという思いは、いつまでも失われるものではありません。

藤縄先生の業績につきましては、私のような者が申し述べるまでもないと思いますが、ギリシア文明への強い探求心を変わらず抱き続けてこられたその情熱に、私は大きな影響を受けました。

その中でも、先生のゼミの生徒になった最初の授業で、先生の論文「ヘレニズムとヘブライズム」を先生自ら解説してくださった時のことが印象に残っています。内容は家畜についての考察でしたが、そこには常に古代社会に対する現代社会のあり方、ひいては私たち自身の生き方についてへの問いかけがあったように思います。こうした先生の姿勢から、私は歴史を学ぶ、または歴史から学ぶとはどういうことかを教わりました。

また、卒業論文作成に向けてのテーマ選びの際には、多くのアドバイスをくださいました。ころころとテーマを変えては先生に質問しに行くなどご面倒をおかけしたにもかかわらず、その都度、先生は丁寧な説明と多くの参考文献を紹介してくださいました。

先生のおそばで学んだ月日は本当に短いものでしたが、非常に充実した日々でありました。先生に学んだあの楽しい日々を励みとして、これからも一社会人として貢献できるように頑張っていきたいと思います。

そして、いつの日か、先生の本を片手に、先生の愛したギリシアの大地を訪れてみようと思っています。

（二〇〇〇年度卒業生）